

漱石全集

第三卷

漱石全集
第三卷

虞美人艸
坑夫

昭和四十一年二月十八日 第一刷發行
昭和五十九年十二月十八日 第三刷發行

漱石全集 第三卷 虞美人草 坑夫

定價 三千五百圓

著 者 夏 目 漱 石

發 行 者 綠 川 亨

發 行 所 株式會社 岩 波 書 店
東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

虞美人草

三

坑夫

四三三

解説

六七五

注解

六九九

虞美人草

明治四〇、六、二三——四〇、一〇、二九

一

「随分遠いね。元來何所から登るのだ。」

と一人が手巾で額を拭きながら立ち留つた。

「何所か己にも判然せんがね。何所から登つたつて、同じ事だ。山はあすこに見えて居るんだから」と顔も體軀も四角に出来上つた男が無雜作に答へた。

反を打つた中折れの茶の廂の下から、深き眉を動かしながら、見上げる頭の上には、微茫なる春の空の、底迄も藍を漂はして、吹けば揺くかと怪しまるゝ程柔らかき中に屹然として、どうする氣かと云はぬ許りに叡山が聳えてゐる。

「恐ろしい頑固な山だなあ」と四角な胸を突き出して、一寸櫻の杖に身を倚たせて居たが、

「あんなに見えるんだから、譯はない」と今度は叡山を輕蔑した様な事を云ふ。

「あんなに見えるつて、見えるのは今朝宿を立つ時から見えて居る。京都へ來て叡山が見えなくなつ

ちや大變だ」

「だから見えてるから、好いぢやないか。余計な事を云はずに歩行いて居れば自然と山の上へ出るさ」
細長い男は返事もせず、帽子を脱いで、胸のあたりを煽いで居る。日頃からなる廂に遮ぎられて、
菜の花を染め出す春の強き日を受けぬ廣き額丈は目立って蒼白い。

「おい、今から休息しちや大變だ、さあ早く行かう」

相手は汗ばんだ額を、思ふ儘春風に曝して、粘り着いた黒髪、逆に飛ばぬを恨む如くに、手巾を片手に握つて、額とも云はず、顔とも云はず、頸窩の盡くるあたり迄、苦茶々々に掻き廻した。促がされた事には頓着する氣色もなく、

「君はあの山を頑固だと云つたね」と聞く。

「うむ、動かばこそと云つた様な按排ぢやないか。かう云ふ風に。」と四角な肩をいとど四角にして、
空いた方の手に榮螺の親類をつくりながら、聊か我も動かばこそその姿勢を見せる。

「動かばこそと云ふのは、動けるのに動かない時の事を云ふのだらう」と細長い眼の角から斜めに相
手を見下した。

「さうさ、」

「あの山は動けるかい」

「アハ、又始まつた。君は余計な事を云ひに生れて来た男だ。さあ行くぜ」と太い櫻の洋杖を、ひゆうと鳴らさぬ計りに、肩の上迄上げるや否や、歩行き出した。瘡せた男も手巾を袂に収めて歩行き出す。

「今日は山端の平八茶屋で一日遊んだ方がよかつた。今から登つたつて中途半端になる許りだ。元來頂上迄何里あるのかい」

「頂上迄一里半だ」

「どこから」

「どこからか分るものか、高の知れた京都の山だ」

瘡せた男は何にも云はずにや／＼と笑つた。四角な男は威勢よく喋舌り續ける。

「君の様に計畫ばかりして一向實行しない男と旅行すると、どこもかしこも見損つて仕舞ふ。連こそいゝ迷惑だ」

「君の様に無茶に飛び出されても相手は迷惑だ。第一、人を連れ出して置きながら、何處から登つて、何處を見て、何處へ下りるのか見當がつかんぢやないか」

「なんの、是しきの事に計畫も何も入つたものか、高があゝの山ぢやないか」

「あの山でもいいが、あの山は高さ何千尺だか知つてゐるかい」

「知るものかね。そんな下らん事を。——君知つてるのか」

「僕も知らんがね」

「それ見るがいい」

「何もそんなに威張らなくてもいい。君だつて知らんのだから。山の高さは御互に知らんとしても、山の上で何を見物して何時間かかる位は多少確めて來なくつちや、豫定通りに日程は進行するものぢやない」

「進行しなければ遣り直す丈だ。君の様に余計な事を考へてるうちには何遍でも遣り直しが出来るよ」と猶さつさと言へ行く。瘠せた男は無言の儘あとに後れて仕舞ふ。

春はものゝ句になり易き京の町を、七條から一條迄横に貫ぬいて、烟る柳の間から、温水水打つ白き布を、高野川の磧に數へ盡くして、長々と北にうねる路を、大方は二里餘りも來たら、山は自から左右に逼つて、脚下に奔る潺湲の響も、折れる程に曲る程に、あるは、こなた、あるは、かなたと鳴る。山に入りて春は更けたるを、山を極めたらば春はまだ残る雪に寒からうと、見上げる峯の裾を縫ふて、暗き陰に走る一條の路に、爪上りなる向ふから大原女が來る。牛が來る。京の春は牛の尿の盡きざる程に、長く且つ靜かである。

「おゝい」と後れた男は立ち留りながら、先きなる友を呼んだ。おゝいと云ふ聲が白く光る路を、春

風に送られながら、のそり閑と行き盡して、萱許りなる突き當りの山に打突つた時、一丁先きに動いて居た四角な影はたと留つた。瘠せた男は、長い手を肩より高く伸して、返れ々と二度程揺つて見せる。櫻の杖が暖かき日を受けて、又びかりと肩の先に光つたと思ふ間もなく、彼は歸つて來た。

「何だい」

「何だいちやない。此所から登るんだ」

「こんな所から登るのか。少し妙だぜ。こんな丸木橋を渡るのは妙だぜ」

「君見た様に無暗に歩行いて居ると若狹の國へ出て仕舞ふよ」

「若狹へ出ても構はんが、一體君は地理を心得て居るのか」

「今大原女に聽いて見た。此橋を渡つて、あの細い道に向へ一里上がると出るさうだ」

「出るとは何處へ出るのだい」

「叡山の上へさ」

「叡山の上の何處へ出るだらう」

「そりや知らない。登つて見なければ分らないさ」

「ハ、ハ、君の様な計畫好きでも其所迄は聞かなかつたと見えるね。千慮の一失か。それぢや、仰せに従つて渡るとするかな。君愈登りだぜ。どうだ、歩行けるか」

「歩行けないたつて、仕方がない」

「成程哲學者丈あらあ。それで、もう少し判然すると一人前だがな」

「何でも好いから、先へ行くが好い」

「あとから尾いて来るかい」

「いゝから行くが好い」

「尾いて来る氣なら行くさ」

溪川に危うく渡せる一本橋を前後して横切つた二人の影は、草山の草繁き中を、辛うじて一縷の細き力に頂きへ抜ける小徑のなかに隠れた。草は固より去年の霜を持ち越した儘立枯の姿であるが、薄く溶けた雲を透して眞上から射し込む日影に蒸し返されて、兩頬のはてる許りに暖かい。

「おい、君、甲野さん」と振り返る。甲野さんは細い山道に適當した細い體軀を眞直に立てた儘、下を向いて

「うん」と答へた。

「そろ／＼降参しかけたな。弱い男だ。あの下を見給へ」と例の櫻の杖を左から右へかけて一振りに振り廻す。

振り廻した杖の先の盡くる、遙か向ふには、白銀の一筋に眼を射る高野川を閃めかして、左右は燃え

崩るゝ迄に濃く咲いた菜の花をべつとりと擦り着けた背景には薄紫の遠山を縹緲のあなたに描き出してある。

「なる程好い景色だ」と甲野さんは例の長身を振ち向けて、際どく六十度の勾配に擦り落ちもせず立ち留つて居る。

「いつの間に、こんなに高く登つたんだらう。早いものだな」と宗近君が云ふ。宗近君は四角な男の名である。

「知らぬ間に墮落したり、知らぬ間に悟つたりするのと同じ様なものだらう」

「晝が夜になつたり、春が夏になつたり、若いものが年寄りになつたり、するのと同じ事かな。それなら、おれも疾くに心得て居る」

「ハ、ハ、ハ、夫で君は幾歳だつたかな」

「おれの幾歳より、君は幾歳だ」

「僕は分かつてるさ」

「僕だつて分かつてるさ」

「ハ、ハ、ハ、矢つ張り隠す了見だと思える」

「隠すものか、ちゃんと分かつてるよ」

「だから、幾歲なんだよ」

「君から先へ云へ」と宗近君は中々動じない。

「僕は二十七さ」と甲野君は雜作もなく言つて退ける。

「さうか、それぢや、僕も二十八だ」

「大分年を取つたものだね」

「冗談を言ふな。たつた一つしか違はんぢやないか」

「だから御互にさ。御互に年を取つたと云ふんだ」

「うん御互にか、御互なら勘辨するが、おれ丈ぢや……」

「聞き捨てにならんか。さう氣にする丈まだ若い所もある様だ」

「何だ坂の途中で人を馬鹿にするな」

「そら、坂の途中で邪魔になる。ちよつと退いて遣れ」

百折れ千折れ、五間とは直に續かぬ坂道を、呑氣な顔の女が、御免やすと下りて来る。身の丈に餘る粗朶の大束を、縁り洩る濃き髪の上に壓へ付けて、手も懸けずに戴きながら、宗近君の横を擦り抜ける。生ひ茂る立ち枯れの萱をごそつかせた後ろ姿の眼につくは、目暗綺の黒きが中を斜に抜けた赤襷である。一里を隔てゝも、そこ指す指の先に、引つ着いて見える程の藁葺は、この女の家でもあらう。天武天

皇^{のう}の落^おち玉^{たま}へる昔^{むかし}の儘^{まま}に、棚^{たなび}引^ひく霞^{かすみ}は長^{とこ}しへに八瀬^{やせ}の山里^{やまざと}を封^{ふう}じて長閑^{のどか}である。

「此邊^{このへん}の女^{をんな}はみんな奇麗^{きれい}だな。感心^{かんしん}だ。何だか畫^えの様^{よう}だ」と宗近君^{むねちかくん}が云ふ。

「あれが大原女^{おほはらめ}なんだらう」

「なに八瀬女^{やせめ}だ」

「八瀬女^{やせめ}と云ふのは聞いた事^{こと}がないぜ」

「なくつても八瀬^{やせ}の女^{をんな}に違^{ちが}ひない。嘘^{うそ}だと思^{おも}ふなら今度^{こんど}逢^あつたら聞^きいて見^みよう

「誰^{だれ}も嘘^{うそ}だと云^いやしない。然^{しか}しあんな女^{をんな}を總稱^{そうしょう}して大原女^{おほはらめ}と云^いふんだらうぢやないか」

「屹度^{きつと}さうか、受合^{うけあ}ふか」

「さうする方^{ほう}が詩的^{してき}でいゝ。何^{なん}となく雅^がでいゝ」

「ぢや當分^{たうぶん}雅號^{ががう}として用^{もち}ゐてやるかな」

「雅號^{ががう}は好^いいよ。世^よの中^{なか}には色々^{いろ／＼}な雅號^{ががう}があるからな。立憲政體^{りつけんせいだい}だの。萬有神教^{ばんいうしんけう}だの、忠^{ちゆう}、信^{しん}、孝^{かう}、

悌^{てい}、だのつて様々^{さまざま}な奴^{やつ}があるから」

「なる程^{ほど}、蕎麥屋^{そばや}に藪^{やぶ}が澤山^{たくさん}出來^きて、牛肉屋^{ぎゅうにくや}がみんないゝ^{*}はになるのも其格^{そのかく}だね」

「さうさ、御互^{おたがひ}に學士^{がくし}を名乗^なつてるのも同^{おな}じ事^{こと}だ」

「詰^{つま}らない。そんな事^{こと}に歸着^{きぢやく}するなら雅號^{ががう}は廢^やせばよかつた」

「是から君は外交官の雅號を取るんだらう」

「ハ、ハ、あの雅號は中々取れない。試験官に雅味のある奴が居ない所爲だな」

「もう何遍落第したかね。三遍か」

「馬鹿を申せ」

「ぢや二遍か」

「なんだ、ちゃんと知つてる癖に。憚りながら落第は是でたつた一遍だ」

「一度受けて一遍なんだから、是からさき……」

「何遍やるか分らないとなると、おれも少々心細い。ハ、ハ、ハ。時に僕の雅號はそれでいゝが、君は

全體何をするんだい」

「僕か。僕は叡山へ登るのさ。——おい君、さう後足で石を轉がしてはいかん。後から尾いて行くも

のが劍呑だ。——あゝ随分草臥た。僕はこゝで休むよ」と甲野さんは、がさりと音を立て、枯薄の中へ

仰向けに倒れた。

「おやもう落第か。口でこそ色々な雅號を唱へるが、山登りはから駄目だね」と宗近君は例の櫻の杖

で、甲野さんの寐て居る頭の先をこつゝ敲く。敲く度に杖の先が薄を薙ぎ倒してがさゝ音を立てる。

「さあ起きた。もう少しで頂上だ。どうせ休むなら及第してから、緩つくり休まう。さあ起きろ」